
4つの魔動派

零物質

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

4つの魔動派

【Nコード】

N3837G

【作者名】

零物質

【あらすじ】

4つの魔動派……。その4つの力はとてすさまじく、世界の軸を揺るがすほどである。彼らは「誇り」のために戦い続ける……。しかし、ある年を境に彼らの戦いに終わりを告げ、永き平和を迎えた……。それからちょうど300年が過ぎた2066年、モナコに一人の現役大学生がいた。彼の名は、「グロウ・ゲージ」。何の変哲もない普通の人間である彼の日常に、恐るべき出来事が次々と身に降りかかる。あの出来事によって、自分の人生が180度変わることに……。そして、4つの魔動派が再び動き出す……。

はたして、グロウ青年に降りかかる恐るべき出来事とは？そして世界の運命は・・・！？大長編ファンタジー小説の幕開けです！！

E p 1：日常の中の非現実 - 最初の異変 -

4つの魔動派――

それは、恐るべき4種の魔道師たちの集まりの総称である。

2000年前まで一つだったものが四つに裂かれ、人間社会の裏で戦い、暗躍し続ける存在となりはてた……。そんな彼らにも平和がやってきた、300年という永き平和が……。

4つの魔動派たちはその300年間、悠々と過ごしていた。

しかし、その調和が今再び崩れかけている。そしてついにその「崩れ」が人間社会にまで及ぼす事態になる……。永久に行われ続けることになる、恐ろしい事態に……。

そんな恐ろしい事態が起ころうとしているのにもかかわらず、今日も人間社会はゆっくりと、のんびりと時を過ごしていた……。

- モナコ -

時は2066年。

ここは、世界的な超大国「モナコ」。

面積がわずか「1,95平方km」のミニ国家であるにもかかわらず、この50年で輸出入額が急上昇し、観光客数がフランスに次ぐ世界ナンバー2となり、人口も8万人にまで増えた。

経済、政治、軍事においてもアメリカと同等に張り合える存在となった。

そして、あの毎回恒例の「F1モナコグランプリ」も完全に独立して「MGP」となり、世界的な大会の一つとなった。

モナコはこの50年で急成長したのだ。確実に。

EUでは中心的な存在に、世界でもアメリカや日本、ロシアなどと

ともに世界の中心的存在となった。

この物語は、完全に変貌した「モナコ」の「モンテカルロ区」から始まる。

この場所からすべてが・・・動き出す・・・！！

・モナコ・モンテカルロ区・

ここは世界的な大都市中の大都市ともいえる超大都市「モンテカルロ区」。

高速道路が交差し、車が飛び交う中、一人の青年が橋の下で過ごしていた。

彼の名は「グロウ・ゲージ」――

21歳の、外見はごく普通の、ホントに普通の青年である。

しかし、唯一違うことがあった。

それは「ホームレス生活をしていること」である。

彼は高速道路の下でホームレス生活をしていたのだ・・・。

しかし、彼の寝ているその環境はほかのホームレス生活をしている人と全く違う。

普通のホームレスはシートを敷いて寝たりなどしている。

しかし、彼のは完全な小型の家であるのだ！！（犬小屋の10倍くらい大きさ。）

複数の段ボールをつぎはぎしている仕様であり、さらにその外壁として石やレンガがコンクリートで固められてある。

ホームレス生活をしている人々にとってはとても豪華な場所である。

そんな場所で、彼は今日もムニャムニャ寝ていた。

グロウ「うん・・・。ムニャムニャ・・・。」

彼は寝言を言いながら体を寝返る。

とその時、彼の耳元でリンリンと目覚まし時計が鳴った。

彼は眼をこすりながら手をゆっくり伸ばして止める。

ゆっくり止めた後に、念のため時計の時間を確認する。

グロウ「・・・もう5時か・・・。ふああ、よく寝た・・・。」

彼は気持ちよく背伸びをした。

そのあとゆっくりと起き上がり、しばらくそのままボーっとする。

そしてやっとのことで意識が戻る。

グロウ「・・・よし、そろそろMGPに行くか・・・。よっこいしょ!!」

彼はひざに手をついて立ち上がり、足元にたたんであった服のかたまりから無理やり1つの服と一つのズボンを引っ張り出した。

そのせいで服の山が一気に崩れる・・・。

彼はそんなことも気にせず、パジャマから服に着替える。

チマチマチマチマ・・・

グロウ「ああ・・・今日はだるいになんでMGPが・・・ったく!!」

グロウはやけくそになって、入りそうにないボタンの穴に無理やりボタンを入れようとした。

その結果、ボタンを通す穴がやぶれて広がり、その勢いでボタンも吹っ飛んだ。

グロウ「・・・ああん!!今日という今日はホント最悪だなあ!!」

くそおっ!!」

グロウは不快な気持ちでズボンをはい。

そのままカバンを持って入口の段ボールでできたドアを押して外に出た。

グロウが外に出た直後に、「ヤツラ」が視界にはいった・・・。

バレン「グロウ!! おっはよお!!」

グロウ「あ、おはよう・・・。」

その「ヤツラ」はグロウの友達たちだった。

グロウに朝一番に声をかけたのは、「バレン・バレン」である。

バレンは「日本とイタリアのハーフ」で、そのため見た目が何となく東アジア系。

バレンは景気よくグロウに声をかけるが、グロウはいまだに不機嫌の様子。

グロウ「おいおいおい、俺を勝手にこんな時間に設定させてさあ、こんなに早く起こすなんてひどくねえか? 第一「MGP」は夕方の6時に開催するんだし・・・。」

グロウは眉をひそめ、自分のもやもやを一気に晴らそうとするかのように自分の文句をひたすらガミガミ言い続ける。

そんなグロウが文句を言っている途中に誰かが言葉をはさんだ。

デルタ「いつちいちゃうっせえんだよ!! 早く起きるのにはわけがあるんだよ!! 少しはこっちの話を聞け!!」

グロウの話を途中で止めたのは、「デルタ・ドレッド」だった。デルタはもっぱらの「フランス人」。すんごく短気な性格で、もめ

た時が一番厄介な奴だ・・・。

グロウ「朝っぱらからキレられてもこっちが困るんですけど・・・。」

グロウは不快そうにしながら頭をかく。

そんな彼の肩にポンポン、と誰かが叩いた。

クリスト「んま、どうでもいいじゃんかゝさ、行こうぜい!!」

グロウの肩を叩いたのは「クリスト・ティンクス」だった。

彼の出身地は誰も知らない。彼自身もなぞだらけだ。

クリストはそのまんまグロウと肩を組んで道路わきを歩いた。

グロウ「ところで聞くけどさあ、なんで俺をこんなに早く起こす必要があったんだ？」

バレン「グロウ、そんなのも知らないの？わかるだろ？あれだよあれ、えーっと、「場所取り」だよ。」

グロウ「ば、場所取り？」

グロウは口をポカーンとしていた。

バレンは身振り手振りでグロウに理解してもらおうとした。

バレン「朝の5時でも並んでる人がすごく多いのに、7時とか8時とかに行ったらたまったもんじゃないよ。もう満員で見れなくなっちゃうよ。」

クリスト「少しは理解しようぜ!!しつかり!!」

クリストはグロウの背中を二回たたき、そのあとに背中をさする。そんなグロウは目がとろんとしていて半分寝ていた。

グロウ「あああ．．．」

クリスト「グロウ？おい、おい。」

クリストはグロウの目の前で手を振ってみる。

グロウは「はっ」っとし、われに返る。

グロウ「え．．．？あ、う、え？」

デルタ「こいつ、半分寝てたな．．．？」

デルタは腕を組んで、グロウの方向にぎろりとにらむ。

そんなデルタの目の前で、バレンは時計を確認する。

その時間を見てバレンは驚きの表情を見せる。

バレン「えっ．．．！？」

グロウ「ど、どうした！！」

バレン「これを見る！！もう５時半だあ！！いつそげええーっ！！！！」

グロウ「まじかよ！！やつべー！！」

グロウ達４人は歩きから走りへと変え、超特急で突っ走った。

ハア．．．ハア．．．

グロウ「本当に間に合うのかよ！！」

デルタ「おれに．．．聞くなっ！！」

バレン「この橋を越えたら．．．会場が．．．見えるぞ．．．！！」

グロウ達は３０ｍほどの橋４つを渡り、オフィスビルに挟まれた道路のわきに来る。

しばらく走っていると、あのコースが見えてきた——

グロウ「お、もうすぐだ・・・!!」
バレン「力を抜くんじゃねえぞ!!いつそげえ!!」

グロウ達は全力疾走で会場へと向かった。
走っている途中、グロウは横をふと見た。

グロウ「ハア・・・ハア・・・。・・・ああん・・・!」?

グロウが見たものは、オフィスビルのガラスだった。
そのガラスの向こうがわで、誰かと誰かが技を出し合って戦っているではないか――

グロウは自分の目を疑い、目をこすってパチパチし、もう一度見る。
やはり誰かが戦っている――
なんだ、あれは・・・?

グロウ「おい、おい!!」
バレン「んおお、なんだ!」?

グロウはバレンの肩をたたき、ビルに指をさす。

グロウ「ビルのガラス見ろよ!!なんか誰かと誰かがなんか・・・。
」
バレン「こんな時に話しかけんな!!」

バレンはグロウのことをそのままスルーし、会場まで一直線に突っ走る。

グロウはその後会場に着くまでずっと無口のままであった。

それから3分後――

バレン「とりあえずやってきたのは来ただけ……。」
デルタ「いったい何人並んでんだよおおーっ!!!!」

バレン達が見たのは驚きの光景であつた。

例年以上の人盛りで、しかもチケット売り場が見えないほど満タんだつたのだ!!

「最後尾」の看板はまだ立てられてないけど、これはやばそうだ――

一体いつまで待てばいいのか分からないのでとりあえず近くの警備員に聞いてみた。

バレン「あのお、すいません。」

警備員「はい? どうしましたか?」

バレン「受け付け開始してからこの列の番になるまで大体どれくらいの時間が……」

警備員「3時間ぐらいだね。」

バレン「(は……!?) あ、ありがとうございました……。」

バレンは真白にした顔でみんなに伝える。

それを聞いたみんなは顔が一斉に蒼白に……。

デルタ「待て待て待て待て……。なんで3時間も受け付け開始から待たなきゃいけないんだよ!!」

クリスト「受付が12時半から始まるから大体3時半に順番が来るね。」

4人で囲んで文句を言いあっていたこのときにグロウは別の話を持ち出してきた。

グロウ「ちょっと待って。今何時？」

バレン「え？ちょっと待てよ。ええっと・・・」「5時50分」ですな。」

バレンは腕時計を見ながらグロウに告げる。

グロウはがつくりとうなだれる。

グロウ「あーっ！！もうだめじゃん！！今を6時と考えても3時半まで9時間半もあるじゃん・・・。」

クリスト「ううむ・・・。どうにかしなくては・・・。」

クリストはあごに手を当て、じつくりと考える。

クリスト「うーん・・・。お、こんなのどうだ？」「じゃんけんに最後まで残ったやつはここで待っておく」っての。んで勝ったやつらはそこらへんでいろいろと歩き回るとか。これどう！？どう！？どう！？？」

クリストはバレンに指をさしながら押し迫っていく。

バレンは「わかったわかった」と、首を後ろに引きながら両手を前に出す。

バレン「はいはいはい、了解しました。やりますよ。」

クリスト「よし、んじゃさっそくじゃんけん！！」

4人はとりあえずじゃんけんをする。

最初はグー、ジャンケンポン――

グロウ、グー。バレン、グー。デルタ、グー。クリスト、チョキ。負けた瞬間クリストは自分の「チョキ」の手をプルプルさせながら見る。

クリスト「そ、そんなぁ・・・。僕が居残り・・・!?!」
デルタ「言いだしつって全くいいことねえなぁ。」

デルタはクリストに皮肉を言い、クリストの心を突く。
それを聞いたクリストは不快な気持ちに・・・

クリスト「おいおいおい、そりゃないわ・・・。」

クリストが地面に手をついてがっかりしているこんなときに空の向こうに流れ星が!!

キラリーン

バレン「おーい、なんかあんなところに流れ星が!!」

バレンはその流れ星に向かって指をさす。

クリストは、下に顔を向けていた状態から上に向ける。

クリストは一瞬目をぱちぱちさせる。

クリスト「え・・・?こんな朝に・・・え・・・?んなはずな・・・」

「

クリストが言いかけたその瞬間、その流れ星が東方面の約200m
先で地面に流れ落ちて激突し、爆発を引き起こした!!

その勢いでグロウ達がいる場所で地震が起こり、大混乱におちいる・・・。

グロウ「ぐわあっ!!」

デルタ「のわっ!?!」

ほぼ全員がガクツとなって地面につき、中には地面に張り付く者もいた。

10秒ほどしてやっとおさまった。

だが、周りは大混乱。警備員もあちらそちらへと走りまわって対応するのも大忙しの様子。

グロウ達自身もパニック状態で一瞬無言の時間が過ぎていた――

グロウ「ああ……。」

デルタ「おい……あそこってたしか……。」

バレン「モナコ大学……だったよな……?」

デルタとバレンはお互いの顔を見つめあい、確認しあう。声を震わせながら。

2人は目を細めて、200mの現場を見つめる……。

大学だと思われる場所から、真っ赤な煙が空高くまで、立ち上る……。

そして、放心状態のグロウの脳裏に、あの悲劇が再びよぎる――

E p 2 に 続 く ! !

Ep2：一か八かの大計画 - 大学へ侵入 -

デルタとバレンはお互いの顔を見つめあい、確認しあう。声を震わせながら。

2人は目を細めて、200m先の現場を見つめる・・・。

大学だと思われる場所から、真っ赤な煙が空高くまで、立ち上る・・・。

そして、放心状態のグロウの脳裏に、あの悲劇が再びよぎる――

グロウ「あああああ！！！」

グロウは頭を両手で思い切り抑え込むながら地面にしゃがみ込む。そのままごろんと横になり、地面の上でじたばたと暴れる。

グロウ「あああああーっ！！！」

デルタ「また始まったよ・・・。」

デルタはいつもの「アレ」をポケットからガサゴソと取り出し、グロウの口に当てて無理やり飲ませた。

グロウ「あああ・・・あ・・・うう・・・。」

デルタ「はあ・・・今日も抑制剤持ってきてよかった・・・。」

デルタが飲ませたのは、グロウが暴れるのを防ぐための「パニック抑制剤」であった。

グロウは動きが止まり、そのまま地面の上で大の字になった。

グロウはそのまま空を見つめる。

グロウ「・・・。」

デルタ「毎回これだよな。空から落ちるものを見るといつもこんなのだ……。」

デルタも空を見つめる。

グロウはなぜいつもそのようなものを見るとパニックに陥ってしまうのだろうか――

デルタはそんなことを思いながらバレンの方向に顔を向ける。

デルタ「おい。」

バレン「どうした！！そんなことどうだっていいんだよ！！今から大学に行くよ！！」

デルタ「おれも今それを言おうとしてたんだぞ！！」

バレンとデルタは首を縦に振りあう。

クリスト「グロウは俺がみとくから、2人は大学に行ってて！！」

クリストは2人にそう告げ、一方の2人も了承して大学へとダッシュで向かう。

距離が200mであるため、すぐにたどり着いた。

彼らがたどり着いた「モナコ大学」――

生徒総数48360人、最高階数18階、キャンパス数3つというこの規模のでかさは誰もが圧倒される。

そんなモナコ大学にやってきた2人。実は「バレン」「デルタ」はこの生徒だったのだ。もちろんあの2人も。

バレン、デルタ2人とも大学の頂上を見上げる。

彼らの勘によると、ここが落ちた場所だそうだ。

それを確かめるべく、彼らはやってきた。

バレン「デルタ・・・。」

デルタ「グラウンドを見るか・・・？」

2人はグラウンドを見に裏側へ回る。

グラウンドを見た瞬間、彼らは体が凍りついた。

やはり、ここが――

彼らの震えは止まらない。

グラウンドに、あの流れ星の正体「隕石」によってグラウンド全体に大きな穴がドンとあいてあった。

しかし、穴の底が見えないため、隕石も見えない。

彼らは全身がふるえつつもキャンパスの表を見る。

さらに震えが過剰した。

彼らが見たのは、ほぼ半壊している大学の姿だった。

キャンパス裏は無傷だったのに、このギャップは――

デルタ「そ・・・そんなばかな・・・。」

バレン「うそだろ・・・？」

2人がしばらく突っ立っていると、レスキュー隊や救急車、警察などが次々とやってきた。

デルタ「とりあえず戻ろう。」

バレン「そうだな・・・。ここにいても何にもなんねえし・・・。」

2人はトボトボとグロウ達のいるところへと帰って行った。

・・・

グロウ「あああ・・・。」

クリスト「まだなの、あいつら?」

グロウは地面にあぐらをかいて座ったまま動かない。

一方のクリストもつつたって周りを見るだけで何もしない。

そんな2人の視界に、とぼとぼ歩いてこっちに向かってくるあの2人がいた。

デルタ「ふう・・・。」

バレン「よお。待たせたなあ・・・。」

クリスト「おいおいおい!!どうだった??」

クリストは走ってデルタたちに近づく。

デルタ「やっぱり大学だったよ。グラウンドのど真ん中に落ちてた。」

バレン「しかも半分崩壊。」

クリスト「そ、そんなばかな・・・。」

クリストは一步後ずさりし、ガクツとなつて地面に手を突く。

そんな様子を見ずにデルタは周りを見回した。

デルタは眉をひそめる。

デルタ「おい。おい。」

クリスト「どうした!!」

デルタ「なんで人がいねえんだ。警備員しかうるちよろしてねえじやねえか。」

クリスト「ああ、さっきアナウンスで「中止」だのなんなのいったよ。1週間後に延期だつてさ。」

デルタ「馬鹿じゃねえん!!」

デルタはおでこに手を当て、そのまま上を向きながら後ろへゆっくりと下がる。

バレンもあきれてものが言えない様子。

そして、ついにバレンがこのことを切り出した!!

バレン「おい・・・。」

クリスト「どうした・・・?」

バレン「ちよつとここに集まってくれ。あ、グロウも連れて来い。」

クリスト「あ、ああ・・・。」

クリストはグロウの袖をひっぱって、引きずって無理やりこらせた。

グロウ「・・・で、話って何・・・?」

デルタ「はあ・・・。」

バレン「ちよつとみんなに聞くが・・・」

相当深刻そうな顔でみんなの顔を見回すバレン。

ため息をつき、バレンは言うことをためらおうとしたが、バレンは勇気を振り絞ってみんなに告げた・・・。

バレン「・・・大学に・・・侵入しないか・・・?」

グロウ「え・・・?」

デルタとクリストは顔が真っ青になり、息が詰まる。出る言葉も出やしない。

しかし、グロウはなにがなんだがさっぱりの様子だ。

グロウ「え？なんで侵入すんの？」

バレン「お前ってやつは……。」

バレンは右肩を激しくさすりながらグロウに近づく。

バレン「お前何も聞いてなかったのか？」

グロウ「え？なにを？」

バレン「はあ……。」

バレンは激しくため息をつき、1から100まですべてを説明した。その説明を聞いてグロウの体は一瞬にして固まった。声も震えだす。

グロウ「ま……まさか……大学が、あの流れ星に……。」

バレン「ああ。だからあの大学に侵入しようってんだ。」

デルタ「で、でもさあ……、侵入する必要なくね……？それにさあ、侵入したら監視員に見つけられてつかまっちゃうだろ？いたい何考えて……。」

バレン「黙ってよ……！」

バレンはみんなからの批判を自分の大声で遮り、一瞬空気をしんとさせた。

静かな空気の中、静まりかえらせたバレンが再び口を開く。

バレン「……僕たちには、事実を知る義務がある。あの隕石、どこかで見たことがあるんだ。だから監視員をぶち倒してまでも調べておきたい。みんな、協力頼む……！」

バレンはみんなに向かって頭を下げてお願いした。

それを見たみんなは目がまん丸になった。

バレンがこんなことをするのはめったにないのだ。それほど頑固であるから。

普段全くそんなことをしないバレンの様子を見て、みんなは心を入れ替えた。

クリスト「・・・バ、バレンがそんなに必死に思うのなら、協力するよ。」

デルタ「おれも協力してやるよ。お前がこんなことするということなんてめったにないからな。」

グロウ「それなら、僕もやってやるよ・・・。一人で苦しむなんてダメだしね。みんなで苦しみを分かち合うもんだよ。ね？」

バレン「み、みんな・・・。」

バレンは申し訳なさそうにもう一度頭を下げる。

そして頭をあげると、みんなに手招きを細かく何度もして、小声で「ちよつとちよつとちよつと」と言い、みんなを集めさせる。

中心に集まったところで小声で説明しだす。

バレン「いいか。よく聞け。今頃監視員が何十人も配備されてるはずだ。そこでだ。真夜中の1時頃に大学内に侵入するんだ。まあ、真夜中も監視しているのは当たり前だろうが、監視自体は昼ごろよりは軽いはずだ。」

デルタ「え、そうかあ？昼より夜の警備のほうが厳しいと思うんだけど・・・。」

バレン「とにかく！！・・・僕たちは事実を知る権利、いや・・・義務がある。警察側が事実を知らせないなんておかしいだろ？な？」

バレンはデルタの言葉を打ち消し、みんなに激しく訴えた。

バレン「詳しい話は再集合後に話す。では、真夜中の0時50分に必ずここに集合な。いいな？」

グロウ「え、いや、真夜中ってそれはちょっと・・・」

バレン「いいな!!」

グロウ「あ、はいいい・・・。」

バレンのどなり声に近いような声がグロウの耳の奥の奥までとどろき渡り、グロウはあっけなく了承。そのほかのみんなも了承した。

バレン「んじゃ、そういうことで解散!!各自、家で支度しとけよ!!」

バレンの呼びかけでみんなはゆっくりと離れていく。

バレンの言葉を頭の中にしまい、それぞれの家に帰る。

このメンバーの中で一番距離が遠いところにあるのはやはり「グロウ」だ。

グロウ「くっそおお・・・。なんで真夜中の1時なんだよ・・・。」

グロウは文句をグダグダ言いながら長い長い距離をゆっくりと歩く。そして15分後・・・

ようやく自分の家(?)が見えてきた。

グロウはまるで天国の花畑を目の前にしたかのように目をキラキラさせる。

グロウ「ああ・・・やっと着いたんだな、僕の・・・家・・・!!」

グロウは両手を思いっきりのばして一目散に家へと突入する。

とその時、空から突然どす黒い剣が垂直に落ちてきた！！
その剣はグロウのすぐ目の前に勢いよく地面に刺さった。
目の前にいきなり現れたのに驚いたグロウは尻もちをつき、全身が
ふるえる。

グロウ「ああ・・・？な・・・ええええ・・・？」

グロウは今のこの現状の意味を理解できず、頭の中が完全に混乱していた。

グロウは震えながらもゆっくりと立ち、手をプルプルさせながら剣に触る。

グロウ「あ・・・うう・・・。」

その剣はとてもざらざらしていて、よく見るとサビなどがいっぱいある。

そして何よりも驚いたのは、剣から出ているオーラだった。

それに触れた瞬間、全身がさらに震え上がり、またしりもちをつく。

グロウ「あ・・・ああ・・・ああああーっ！！」

グロウは今までにないすごい恐怖感に襲われ、自分の生活場所へと一目散にダッシュで逃げる。

ドアを勢い良く押し、そのまま布団にダイブして半回転転がる。

グロウ「ああ・・・。今は・・・？」

グロウは暗い暗い天井を見上げながら深く考える。
考えている途中に、横をふと見る。

グロウ「はぁ……。チエロ……。はっ！！真夜中に約束してたのわすれるとこだった……。」

グロウはすぎさま支度にとりかかろうとするが……

グロウ「あら、待てよ……。？支度つつてもなにも用意するものねえなあ……。あらぁ……。？」

グロウは今気づいたのだ。なにも用意するものがないと……。しかし、グロウは無駄に考えた。

グロウ「用意するものと言えば……。懐中電灯か……。」

グロウはすぐさま懐中電灯を端から端まで探しだす。そしてついにタンスの3段目の一番奥から見つけた。

グロウ「や、やったぜええーっ！！！」

グロウは懐中電灯を忘れないようにリュックの中にいれ、汗をぬぐう。

グロウ「ああ、今日って朝っぱらからなんか疲れたなあ……。」

グロウはさりげなく目覚まし時計で時間を確認する。

グロウはパツとしない表情で目覚まし時計をゆっくりおく。

グロウ「ああ……。まだ6時40分か……。まだ真夜中まで十何時間もあるじゃん……。どうせ今日は休みなんだし、寝よ……。フアァ……。」

グロウは布団の中にもぐりこみ、10秒もかからずにぐっすり睡眠につくことができた・・・。

彼は疲れが相当溜まっており、十何時間も寝続けた。

そして、ついに運命の0時の鐘が・・・鳴った・・・！！

ゴオオーンッ！！

グロウ「わぁっ！！」

グロウは真夜中の0時の鐘で起きた。

日本ではこんなことないのに・・・

グロウ「ああ、もう真夜中の0時か・・・。あぁっ！！そうだった！！」

グロウはすぐさまリュックを手探りで探し、やっとのことでリュックを見つける。

グロウ「ああ、よかったー。やっとあったー。あ、ついでに・・・。

グロウはあるものをもっ片手に下げ、そして段ボールのドアをゆっくりと開く・・・。

その先に、朝にあったあの剣はもうなかった・・・。

そんなこともすっかり忘れ、気にせずあの場所へ・・・

そしてあれから50分・・・

グロウ「はぁ・・・おっそいなぁ・・・。」

どうやらグロウが先にたどりついたようだ・・・。
グロウはもうすでに30分も待っている。
そんな中グロウの次に来たのは・・・

クリスト「ああゝ、つつかれたわゝ。あ、グロウじゃん!!」

グロウの次に現れたのはクリストだった。

クリストの左手にもあのケースが・・・。

クリスト「おい、その両手に持つてるのは何だ？」

グロウ「あ、ああ、これは・・・」

グロウが言いかけたその時、後ろからあの声が・・・

デルタ「おーいっ!!俺俺俺俺!!待ってくれたかーっ!!」

グロウの真後ろから猛ダツシュでデルタがかけつけた!!

グロウはあわてて横によけた。

デルタ「はあ・・・はあ・・・大丈夫みてえだな・・・」

クリスト「ううわっ、デルタもなんか持つてるよ・・・」

デルタの肩手にも、あのケースが・・・

クリスト「お、おい、勝手のそれなんだよ!!」

デルタ「お前だって片手になんか持つてるじゃねえか!!」

クリスト「あ・・・」

クリストは図星のようだ・・・。そんな中グロウが間に乱入してきた。

グロウ「まあまあまあ、大人歴1年のお二人さん、ケンカなんてみ
つともないですよ」さつさとこんなの・・・」

デルタ「だまれえ！！お前に言われたくないわぁーっ！！」
クリスト「お前よりましたよ！！」

グロウ「えええ・・・。そりゃないよぉ・・・。」

グロウがまずい立場になったなか、後ろからゆっくりとあいつがや
ってきた。

そう・・・最初に「集まれ」と言った、言い出しっぺの「バレン」
である！！

バレン「おお、すまんすまん。みんな、待たせてしまったようだな。

」

グロウ「あ。言い出しっぺのバレンが来たぞ。」

デルタ「お、やっときたか・・・。」

デルタはこぶしをボキボキならし、バレンに喰ってかかる。

バレンはその様子を見て汗をたらだらし、あのケースを落として
一歩後ろに下がる。

ボトツ

バレン「な・・・何やる気だよ・・・？」

デルタ「なんでお前が一番遅いんだよ！！計画はお前がたてたんだ
ろうが！！」

バレン「ごめんごめんごめん！！僕が悪かった！！」

バレンがあつさりと謝ったのでことはおさまった。

しばらくして彼らは中心に集まり、本題に入る・・・

バレン「では本題に入るが・・・その前にまず、みんな何を持ってきた？」

バレンはみんなにそう聞き、その直後にバレン自身が自分のものを出す。

バレン「おれはファゴット。」

デルタ「ええっ！！お前も楽器持ってきたの！？」

バレン「え、「も」！？ってことはお前も・・・。」

デルタ「「チューバ」さ。俺の楽器の。」

なんと、バレンとデルタは楽器を持ってきたのだ。
んで残りのあの2人も・・・

バレン「まさかとは思うが、クリストとグロウも・・・。」

クリスト「ああ、僕ホルンを・・・。」

バレン「まじかよ・・・。」

グロウ「僕はチェロ。ほら・・・。」

バレン「はあ・・・。」

バレンは頭を抱えた。まさか自分以外で持ってくるとは、と
そしてついにバレンは切り出した。

バレン「それでは、本題に入る・・・。」

E p 3 続く！！

Ep3：運命の出会い - 度重なるトラブル -

そしてついにバレンは切り出した。

バレン「それでは、本題に入る……。」

グロウ「ゴクン……。」

グロウはつばを飲み込む。

バレン「まず、誰か懐中電灯持っているやつはいるか？」

バレンは小さな声でみんなに呼び掛ける。

その中から一人の青年の手がピシッと拳がった。

グロウ「はい！！4人分持つてきました！！」

バレン「ふう。よかったぜい。僕持つてきてないから……。」

バレンはおでこから出た冷や汗をぬぐい、グロウから渡された残りの3つの懐中電灯を配る。

バレン「んまあとりあえずこの件は解決して……。次の話なのだが、とうとう本題中の本題に入るよ。そう、大学への侵入だ。」
デルタ「ついにきましたなあ、侵入計画が……。」

みんなはとっさにあぐらをかいていた体勢から体育座りの体勢になる。

ついに説明の時……

バレン「まずはルートの確認をする。」

クリスト「ルートの確認・・・？大学までの？」

バレン「ああ。ルートなしでやるなんて無謀だってわかるだろ？だから家に帰った後に必死で考えたよ。」

そういうと、バレンは肩にかけていたカバンから一冊のノートを出し、ノートを開いた。

その中身はなんとこの地域周辺の地図だった！！しかも道路や地形、さらには店などの建物や信号まで、さまざまなものがびっしりと細かく書いているのだ！！実際に店などで売っているこちら周辺の地域の地図よりも詳しい。

その地域の中のモナコ大学周辺の地図も書いてあった。やはり細かくて詳しい。

そんな地図にみんな見とれていた。それほどの地図なのである。

デルタ「ううわ、すつげえ・・・。」

バレン「おいおいおい、そんなに近づいてみないでほしい。では、さっそく説明するぞ。」

バレンは赤ペンを準備する。

バレンの説明が始まるとともにバレンの赤ペンが走り出す。

バレン「まずは普通に今のこの場所からまっすぐ行くよなあ？」

クリスト「そりやそうだよ。普通にそつから・・・うんうん。」

クリストはバレンの赤ペンを目で追いかける。

ほかのみんなも普通に追いかける。

バレンは今のこの場所から赤ペンでそのまま大学の門の直前のところまでひいた。

バレン「そしてここからだ。監視員はまず門のところで見張りをし

ているはず……。」

クリスト「そこで裏を回るってわけ？」

バレン「あったりいーっ！！そういうわけだ。」

バレンは手をたたきながら再び赤ペンでなぞりだす。

その途中でデルタが切り出した。

デルタ「でもさあ、裏側に回って監視員がいたらどうすんのよ。

バレン「大丈夫大丈夫。昼にちゃんと確認しといたから。あそこにはだれ一人いなかったよ。」

バレンはそう言いながら赤ペンをどんどん走らせる。

その赤ペンをたどっていたグロウはある疑問点に気がついた。

グロウ「え……？おい、バレン。なんでそこヘイがあるのに直線
ぜなぞってんの？だめじゃないか？」

バレン「おお、これ？ノンノンノン。勘違いはよしな。ここのヘイ
を乗り越えれば近道になるだろう？」

グロウ「ええ、乗り越える気……？」

グロウは首をかしげた。

なぜならば、彼のいうヘイはとても高いからだ。飛び越えようと
してもそうは簡単には越えられない。

その後も延々と話が続き、そして……

バレン「……よし！！これがすべてのルートだ！！みんな、ち
ゃーんと頭の中にたたきこんどけよ！！いいな！？」

クリスト「いや、いきなり「いいな」って言われてもなあ……。
ぶっつけ本番だるい……。」

バレン「馬鹿野郎！！お前気合いあんのかよ……。もう予定から

2分も過ぎてるんだ。さつさと行動して、本当の真実を突き止めるんだ・・・!!」

グロウ「はぁ・・・。なんか大変なことになりそうな気がするなぁ・・・。」

バレン以外のみんなはため息をつき、ゆっくり、ふらふらと立ちあがる。

彼らは遠くにあるあの大学を見つめる。

まさかあの大学に行って人生がガラリと変わってしまうんだなんて――

――
当然彼らはこんな結末を思ってもいなかっただろう・・・。

彼らはゆっくりと歩き出す。自分の知るべき「本当の真実」をつかむために・・・。

彼らはMGPの会場をさつさと走って通り過ぎ、大学へと足音を立てずに急ぐ。

バレン（真実を・・・絶対に・・・!!）

グロウ（なんでぼくがこんなのに付き合わなくちゃ・・・）

デルタ（協力はすると入ったものの・・・はぁ・・・）

クリスト（真剣なのはわかるけど・・・ううん・・・）

彼らはそれぞれの思いを抱きながらも真夜中の大学へと向かう。

近づくにつれ、大学が大きくなっていく。

そして、あの監視員の人影が・・・!!」

バレン「おい、隠れる・・・!!」

グロウ「え？あ、あぁ。」

バレンは小声でみんなに命令する。

彼らはさつとすぐ近くの建物に隠れる。

バレン「はあ……。はあ……。」

グロウ「バレン、今のはまさか……。」

バレン「ああ。監視員だ。まさかあんなところに堂々としたとは・
・」

デルタ「ええ！？おまえ昼に確認しに行ったんじゃないのかよ・
・！？」

バレン「僕は正門を調べられるほどの度胸ある人間じゃないんです
う！！」

彼らはごちゃごちゃともめていた。

そんなときに、あの門にいた監視員が「おい、なんか声がしねえか
？」という声が……。

それを聞いた彼らは一斉に「ドキッ」と跳ねあがった。

バレン「ひ、ひぎゃあーっ！！」

デルタ「おいおいおい、お前があわててどうすんだよ……。
バレン「だつてよく聞けよ。足音がこっちに……。」

デルタ「んん……。？」

耳を澄ましてみると、なんとあの監視員の足音が！！

あの怪しげな話声とともに足音が近づいてくる……。

近づいてくるにつれ、彼らの心臓もバク、バク、とどんどん数を増
していく……

そして、ついに恐怖はピークに達した！！

バレン「ああああーっ！！」

グロウ「に、逃げるぞおおーっ！！」

グロウ達はいに大きな足音を立てて逃げてしまった！！

それを聞き逃さずにいた監視員はすかさず走ってライトで確認する。

監視員「おい！！こら！！その君たち！！こんな真夜中にそこで何をやっているんだ！！」

バレン「やつべ！！見つかっちゃった！！」
クリスト「いやああーっ！！」

彼らの逃亡劇は始まった・・・。

彼らの足と監視員の足では圧倒的な差がある。監視員のほうが圧倒的に早いからすぐにつかまってしまうだろう。
こうなれば身の回りの何かを投げて足止めをくらわすしかない。

監視員「待ちなさい！！」

デルタ「ううわあ！！つかまっちゃったら一巻の終わりじゃねえかよあ！！」

バレン「くっそあ！！おらあっ！！」

バレンは近くにあった直径40cmほどの大きい石を力いっぱい投げ、監視員一人を足止めさせた。

しかし、バレンは足を止めてその石を投げていたため、もう一人の監視員に飛び込まれてつかまってしまった。

捕まったバレンの首元をつかんでそのまま地面に引きずり、ほかの3人を追う。

監視員「さあ、残りの3人もおとなしくつかまりなさい！！」

バレン「たーすけてええーっ！！」

デルタ「どわあーっ！！バレンどうすんだよ！！」

グロウ「わかんないよあーっ！！」

グロウ達は監視員から逃げながら策を考えていた。
しかし、いい策が思い浮かばない。

そうこうしているうちに、あの問題のヘイが目の前に現れた。
グロウ達はそこで立ち止まり、じたばたと焦っていた。

グロウ「ぎゃあーっ！！最初の難関デタアアアアッ！！！！」
クリスト「どうすんのよおーっ！！」

デルタ「・・・こうなりや最後の手を打つしかねえなあ・・・」
グロウ「え・・・？」

そういうと、デルタはポケットから何かを取り出した。
カチャ、カチャ、という音が聞こえ、そのなにかを監視員に向ける。
ま、まさか――

グロウ「デルタアアッ、やめろおおーっ！！」

デルタ「うるせえええーっ！！」

ピギアアアアーンッ！！！！

デルタの持つている何かから勢いよく放たれ、それが監視員の横腹
を中心に広がる。

監視員の口から思いっきり泡が噴き出て、そのまま監視員が地面に
倒れこむ。

そう、デルタが今持っているのは――プラズマガンだ。

デルタ「あ・・・ああ・・・」

デルタは手がブルブル震え、そのままプラズマガンが地面に落ちる。
自由になったバレンはデルタに近づく。

バレン「・・・デルタ・・・なにやらかしてんだよ！！おい！！」
デルタ「ぐ・・・」

バレンはデルタの胸倉をつかみ、そのままデルタを前後に感度も揺らす。

バレン「おい！！聞いてんのかよ！！あんなことやっついていいとも思ってんのかよ！！おい！！」

デルタ「んじゃあなんでお前はあの時石を投げた・・・！？あれだつて立派な犯罪だ・・・」

バレン「それは・・・くう・・・」

バレンはデルタの胸倉をつかむのをやめ、下を向いたままあのヘイのところ差し掛かり、手をつく・・・。

グロウ「バレン・・・もう起きてしまったことはしょうがない。僕たちはこれから逃亡しなくちゃならないんだろね・・・」

バレン「あああ！！なにもかも台無しにしてしまった！！もう何もかも終わってしまった・・・」

クリスト「・・・しょうがない。早く登ろう。このヘイを・・・」

その後、彼らは力を合わせてなんとかヘイに登りきった。

登っている途中にすり傷や打撲などがあつたものの、特にこれといった大きなけがはなかった。

彼らは息を殺し、ゆっくりとグラウンドへと向かう・・・。

彼らは「理学部・医学部・歯学部」が置かれてあるキャンパス付近で待機する。

そして彼らは次の行動を考えていた・・・。

デルタ「ついにここまで来たか・・・」

バレン「はぁ……。僕たちはあくまでも真実を知りにきた。だが、予定がくるってしまった……。」

バレンは頭を抱える。

グロウ「そんなのは今頭から除外して今のことを考えようや。」

バレン「そ……。そうだな……。うん……。」

バレンはそううなずき、そのまま壁をそってグラウンドの様子をのぞく。

その様子を見た瞬間、バレンの体が凍りついた。

バレンはガクガクとなりながらグロウ達3人のほうに顔を向け、歯がガチガチなりながら告げる。

バレン「か……。監視員が……。いつぱい……。倒れ……。てるよ……。」

グロウ「え……。!?」

グロウ達は急いで走ってグラウンドに立つ。

そこには、監視員の死体がグラウンドの端から端までやまほどあった。

彼らの眼は見開いたまま固まっていた。

クリスト「な……。なんじゃこりや……。」

デルタ「いったい何があったんだ……。!?」

バレン「なにがどうあれ、ちょうどいいじゃないか……。さあ、あの大きな穴へ行こう……。!」

バレンはそうみんなに伝え、その指示のもとに動き出す。彼らが目指すは、あの直径50mのでっかいでっかい穴。

穴の淵付近までゆつくりと、ゆつくりと目指す彼ら。
そしてついに穴の淵にたどりついた……。

バレン「きてしまったか……。ついに……。」「
クリスト「ここからですら穴の底が見えない……。」「

彼らの身長は170も180もあるのにいくら背伸びしても首をのばしても穴の底が全く見えない。

そこで彼らは穴の中に入ることにした。

そう決めたその時、穴の底から急激に何から上へあがってきた！！

グロウ「な……。なんだ！？」

デルタ「ああん……。！？」

彼ら4人は、空へと急上昇する謎の物体を見上げた。

その謎の物体とは、彼らの探していたあの隕石なのだ！！

しかし、隕石が浮くなど通常識的に考えてもありえない話。

彼らはその現場を目の当たりにしたのだ。

ついに本当の悪夢が始まる……。！！

彼らが見上げているその隕石は突然青く発光しだし、4つに分裂した。

ブウンッ

バレン「な……。！？」

グロウ「な、なんじゃありや……。！？」

彼らの目がまん丸になったその時、その4つに分裂した隕石がそれぞれ4人に遅いかかてきた！！

デルタ「はあ！？じよ、冗談じゃねえぞ！！」

クリスト「とにかく4手にわかれて逃げろおおーっ！！」

グロウ「ああああーっ！！！！」

彼ら4人はそれぞれの道へと逃げていく。

この別れで何ヶ月もの間、会えなくなるとは思いもしなかっただろ
う――

彼らは夜の風景の中へと消えていき、やがてそれぞれの視界から見えなくなった……。

グロウはキャンパスの表に出て正門を通り、そのまま大学から走り去る。

グロウ「ハア……ハア……。ええ……？まだ追ってくるの……！？」

グロウの後ろには、先ほど分裂していた隕石だった。

その隕石から、直径15cmほどの青い岩石を連射してきた！！

グロウは華麗によけ続けるが、途中でふくらはぎに激突し、そのまま地面に倒れてしまった！！

バタンツ

グロウ「うああっ！！」

倒れたグロウの真上に、あの隕石が……。

その隕石が上からまたあの岩石を連射してきた！！

今度はもろに当たる、だめだ――

そう思った次の瞬間、赤い何かがあの岩石をすべてぶち壊した。

その岩石は周りに散乱する。

パラパラパラ……

グロウ「え・・・！？」

グロウが右に振り向く。

その先には、赤い帽子に赤いマントを垂らした、灰色の長い髪のがいた。

その謎の男の手から灰色の煙が立つ。

シュウウン・・・

グロウ「え・・・ええ・・・！！？ああんっ！？」

グロウはそのまま後ずさりをしようとした。

だが、男はグロウを見逃さなかった。

その男はなんと目にもとまらぬ速さでグロウのもとへとやってきた。
(瞬間移動なのだろうか？)

シュンッ

グロウ「わあっ！？あ・・・あんた誰だよ・・・！！」

???「説明は後だ。それより、君の今持っているチェロを出せ。」

グロウ「（な、なんだこいつは・・・？）え、あ、ああ・・・。」

グロウは言われるがままに従い、チェロを出した。

そんなときに横からあの岩石の連射が飛んできたが、男がすぐにあの赤い玉で防いだ。

グロウ「おい、僕のチェロで何する気だよ。」

???「シイイ・・・。」

男はそのまま両手を突き出してチェロに構えた。

何をする気だ・・・？

そう思っていたその瞬間、その男の手から謎の虹色の粉が！！

その粉がチエロを包み込み、やがてその粉はやんでいく。

グロウ「ああ・・・？」

???「さあ、はやく弓をもって、チエロを・・・！！」

グロウ「は・・・！！？なんでだ・・・！？」

???「あいつを倒す方法がこれ以外からだ。」

そう言われると、グロウは何も文句を言わず、チエロを弾いた。すると、あの隕石が苦しみだし、そのまま爆発四散した！！

あの隕石のかけらがグロウ達の周りを飛び回る・・・。

パラパラパラ・・・

グロウ「え・・・？これだけで・・・。な、なんだこの力は・・・！！？」

???「ひとまず安心した・・・。」

男は首を手で押さえてゴキツと鳴らし、グロウのもとへと近づく。

グロウ「・・・な、なんだよ！！おまえは、いったい何者なんだ・・・！！？」

???「私のことか・・・??？」

男はしばらくためらうつしぐさをする・・・。

E p 4 に続く！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3837g/>

4つの魔動派

2010年10月10日01時30分発行